

卒業式式辞

本日、学士の学位を得た897名の学部卒業生のみなさん、修士の学位を得た239名の大学院修士課程修了生のみなさん、(このなかには観光学研究科修士課程の第1期生5名もおられます)、博士の学位を得た7名の博士課程修了生のみなさん、そして10名の特別支援教育特別専攻科修了生のみなさん、おめでとうございます。

御来賓の本学同窓会の萩平会長ならびに本学後援会の奥村会長、そして列席の理事・副学長、学部長とともにご卒業を心からお祝いいたします。あわせてご家族あるいは関係者のみなさまにも、心からお慶びを申し上げます。



みなさんは、研究室、地域フィールドで大いに学び、またスポーツ・文化的課外活動に励み、個人としての課題を達成されたことと思います。和歌山大学に長く関心を寄せておられるシニアの方からは、「最近の和歌山大学生は自信にみち堂々としている」という言葉を寄せていただいていますし、また、南紀熊野におられるシニアの卒業生からは、「現役和歌山大学生が南紀で地域づくりに参加し活躍している様子が報道等を通して見えるようになって嬉しい。シニアの我々も励まされて頑張る気持ちになる」という

言葉を寄せていただいています。

こうした評価は、教職員の努力でもありますが、なによりも学生のみなさんの努力の成果であり、まずは学長として誇りに思う気持ちと感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

冒頭このようにみなさんにお伝えするのは、ほかでもありません。近年繰り返される若者バッシングを意識してのことです。

人々は言います。「ゆとり教育世代」は、「ものを知らない」「学力が低い」「指示待ちであり、積極性・リーダーシップに欠ける」などなどと。

こうした「ゆとり世代」としてひとくくりにした批判は、教育学者としての私の認識を申し上げるならば、以下に述べるように若者世代への正当な評価を欠くだけでなく、こ

の間の教育改革過程を、「ゆとり教育」という単純かつ正確さを欠く表現によって、その改革の事実と社会的な人間形成過程の問題の正当な吟味をも見失わせる乱暴な議論にすぎません。

ひとつのエピソードを述べましょう。観光学部のゲスト講師で来られた、著名な外資系ホテルの支配人であった外国生活経験の豊富な方は、講義の中で「観光業界は、ゆとり世代を大歓迎する。みなさんの世代は、これまでの日本人が子ども時代、学校生活で経験していない、ゆたかな自然、社会体験をしているホスピタリティあふれる世代だからだ」と繰り返されました。これを聞いた学生は、「ゆとり世代と言われることに反発しつつ、劣等感をもっていた。はじめて私たちの世代を肯定され感激した」と言いました。実際彼女彼らが、通俗的な批判を超えるアクティブな活動を展開していることは、学内外でよく知られています。

また、「日本の大学生は勉強しない」と言われています。アメリカの大学生の大半は、一週間約 11 時間自主学習をしているのに、日本の学生の大半は、4 時間程度しかしていないと。しかし、これも本学の学生について言えば正確な認識ではありません。



本学では、学生のみなさんとこのテーマで懇談の機会をもち、100 人を超える学生が参加してくれました。参加した学生の多くが、大学に入り和歌山の地域にフィールドワークに出て、地域の課題に懸命に取り組む住民、それを支援する教員・研究者の姿を見て、自分がいかに「無知」であるかを知り、学びに貪欲になったと語りました。また受験に追われた高校までの学びがいかに貧困であったかを知ったと語り、「第一志望が不合格ゆえの入学であったが、和歌山大学に入学して、本当に良かった」という学生もいました。

フィールドワークは、自分の幸せだけでなく、自分の人生の目的と社会の幸せを考える「志」のある学びへの意欲を生んでいます。

他方、「多くの学生が勉強しない方がいい。なぜなら自分が少し勉強すれば、上位に立て

る。この方が楽だ。」と正直に語った学生もいました。しかしこの発言は、彼自身のものだけでなく、多くの若者の心情の一端を表現したものだとは私は理解しています。つまり、「競争」「比較」のなかでの学びは、人生の「志」を失わせる学びだということを、彼は、自らの心情の一端を述べてあえて示してくれたのだと思います。

今の社会を動かす主力は、競争社会での勝利を動機づけに、人生を鼓舞してきた世代です。私も、その時代の一人ではありますが、その一人であるからこそ、卒業生を迎える各界の方々に、時代と人間（若者）の変化をしっかりと見つめ、若者世代を受け止めることを求めたいと思います。そしてみなさんは、通俗的な批判に怯むことなく、本学での学びと活動に確信をもって、社会に出ていただきたいと思います。

私は、ここで「志」という言葉を強調したいと思います。その「志」とは、自らの人生を、社会・他者の人生の幸福と深く結びつけ、自らの人生を方向付ける意思であります。

昨年は、経済学部の前身、和歌山高等商業学校設立90周年でしたが、設立3年後、大正15年3月の第1期生の卒業式において、当時の岡本一郎校長も同様なことを述べています。

すなわち、人生は、運命の支配、天分の如何も関係するが、学びへの「志」、学びの蓄積が『人生を支配する』と。

「志」ある学びは、勇気をもたらし、支配的な流れに果敢に挑戦する力を生み出します。そうした二人のミドル世代を紹介しましょう。

いま学校スポーツクラブから全日本級のスポーツ界まで、指導者のなかに暴力が日常化していることが、「社会問題」となっています。このなかで、少年野球、高校野球、プロ野球で活躍した桑田真澄さんは、少年時代からの暴力的指導への屈辱と疑念を忘れず、現役引退後早稲田大学大学院スポーツ科学研究科で学び、修士論文『『野球道』の再定義による日本野球界のさらなる発展策に関する研究』をまとめ、今、スポーツ指導から暴力を一掃するために発言しています。

また、女子柔道の五輪強化選手15人が、監督等指導者の暴力を告発しましたが、この選手たちの相談役であった山口香さん（筑波大学准教授・世界選手権者）は、告発に対して全柔連が隠蔽しようとする姿勢のなかで、選手たちに次のように言ったといいます。

『ここからはあなたたち自身でやりなさい』『あなたたちは何のために柔道をやってきたの。私は強い者に立ち向かう気持ちを持てるように、自立した女性になるために柔道をやってきた』と。（「朝日新聞」2月6日）

桑田さんは、野球に科学の光を当てることを志し、山口さんは、柔道を通して女性の自立を獲得するということを志していたことがわかります。

3・11大震災後の日本、そして人類社会は、大きな変革を求められながら、未来への見通しを築けないままに推移しています。みなさんには、岡本一郎校長が期待したように、卒業後も「志」のある学びを持続し、先輩世代の通俗的な若者批判に怯まず、時代と社会の歪みに挑む勇気を持ち続けていただきたいと思います。

そして最後に、本学が発信している「和歌山大学は、生涯あなたの人生を応援します」というメッセージ通り、教職員は勿論のこと全国各地にいる同窓会の諸先輩方とともに、卒業後もみなさんを応援することを重ねてお伝えし、式辞といたします。

2013年3月26日

和歌山大学長 山本 健慈